

# 2021年6月26日(土) 第29回 学習会まとめ

日本道德教育学会神奈川支部  
第29回学習会

道德科の指導と評価の一体化を目指して  
～一人一人の生き方を励まし、勇気づける授業づくり～

原陽平先生 (寒川町立南小学校)  
小山統成先生 (横浜国立大学教育学部附属横浜小学校)



司会 三ツ木純子先生

## 提案① 寒川町立南小学校 原陽平先生

生き方を励まし、勇気づける道德授業  
～道徳的価値の「共有」と「醸成」について～

寒川町立南小学校  
原 陽平



原 陽平先生

項目

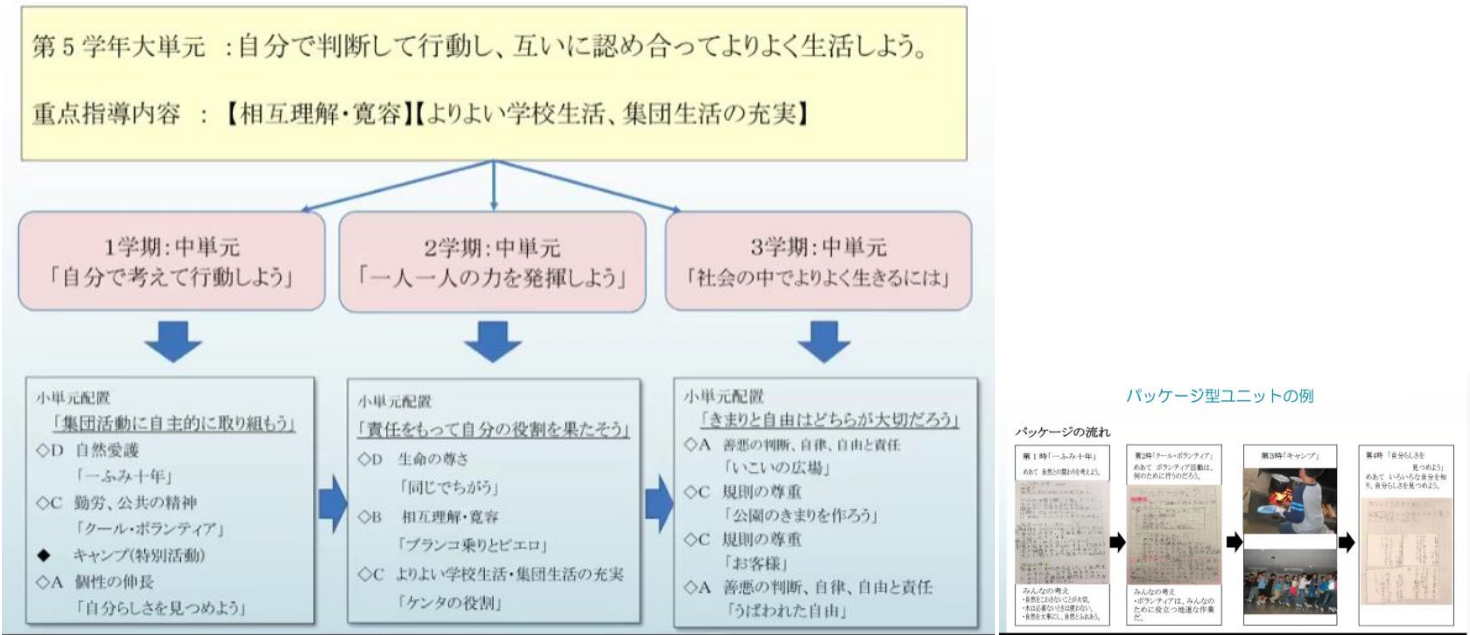
- 1 本校紹介
- 2 これまでの実践  
(1)研究発表テーマと根拠  
(2)5本の柱  
(3)成果と課題
- 3 今年度の実践について  
(1)道徳的価値の共有  
(2)道徳的価値の醸成  
(3)評価について  
(4)成果と課題
- 4 協議テーマ提案
- 5 終わりに

### 2 これまでの実践研究

項目	内容
研究テーマ	「豊かな心を持ち、共に生きる力を育む道德教育 ～楽しんで考える子どもの姿を通して～」
設定理由	「主体的・対話的で深い学び」を実現するため
研究手法	①パッケージ型ユニットを取り入れた指導計画と構造化 ②共通解と納得解 ③相談活動 ④構造的な板書 ⑤道德ノートの活用

提案内容 (左) これまでの実践 (右) 今年度から現勤務校に転任。前任校では研究推進委員長として道德の授業研究を推進。

## 道徳科指導計画の構造図



大単元、中単元、小単元と年間を通して道徳授業の指導計画を考える。

道徳の学習の間にキャンプなどの行事を挟むことで、実生活と学習を往還しながら児童の資質・能力の育成を図っている。

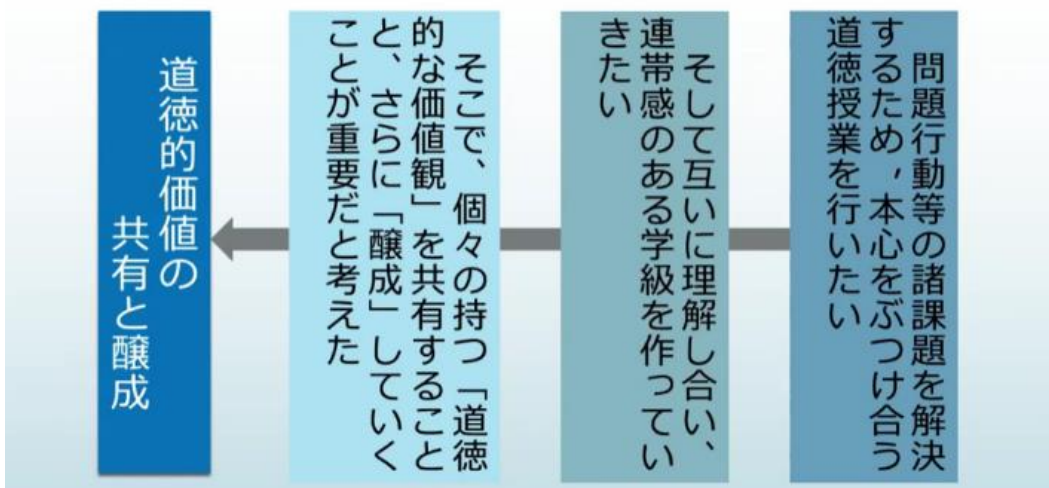
手法	内容
共通解	多くの人が共有できる望ましさ
納得解	共通解を受け止め、これからどう生きていくか
相談活動	様々な形態での話し合いで自己内対話を促す
構造的な板書	ダイナミックで視覚的な板書
道徳ノート	学びの足跡を残し、時折振り返る

「主体的・対話的で深い学び」を実現させるために、児童同士の「語り合い」が重要。さらに、他者とともに課題を追求するために、学習課題の共有が必要。

多くの人が共有し合える望ましさを「共通解」とし、またその道徳的価値をどのように受け止め、これからどのように生きていくかを自覚化した考えを「納得解」と定めた。

子どもたちの道徳性を養うために実践している5点の研究の柱を紹介。語り合いの必要性、共通解と納得解の違いを意識しながら指導している。

### 3 今年度の実践について



新しい勤務校で今までの実践を生かしながら、学校や子どもの実態に合った新しい指導法を考えている。

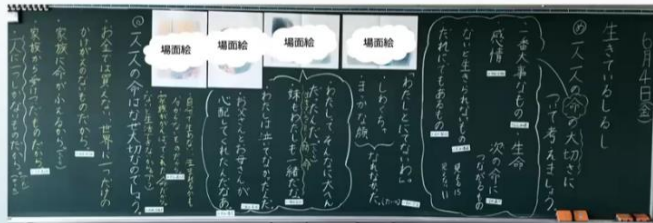


## 授業実践 4年生「生きているしるし」

### 3 今年度の実践について ①道徳的価値の共有「2つの授業実践から」

4年道徳「生きているしるし」

学習課題「一人一人の命はなぜ大切なのでしょう。」



### 3 今年度の実践について ①道徳的価値の共有「2つの授業実践から」 「生きているしるし」 あらすじ

主人公である「わたし」に妹が生まれるのだが、真っ赤な顔をしわくちゃにして泣いている妹の姿を見て「わたしとは似てないな」と感じる。そこで父が、「わたし」が生まれたときの話を語る。

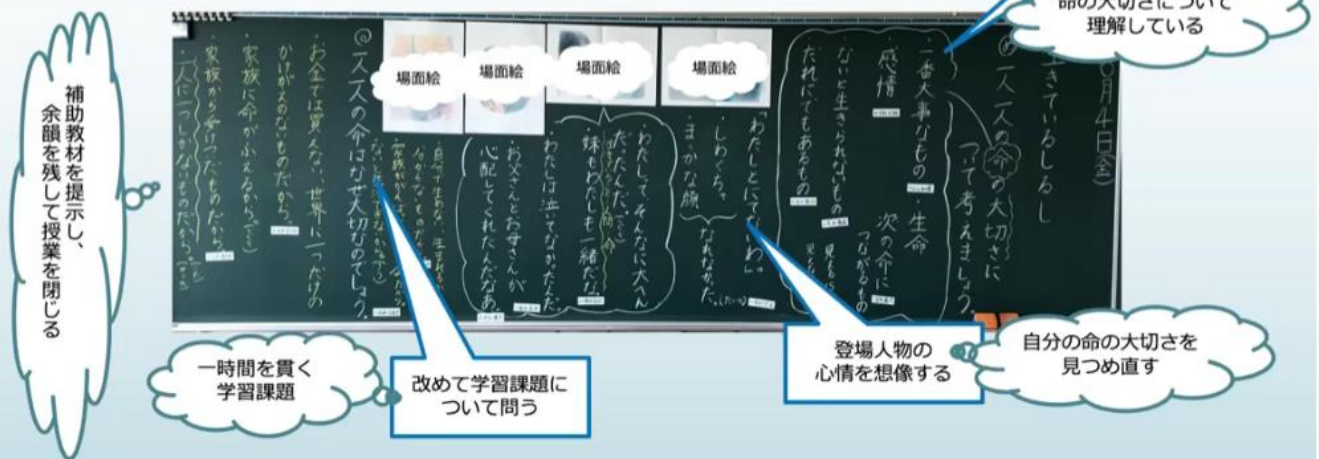
予定日よりかなり早く生まれてきた「わたし」は、保育器で過ごし、自発呼吸もできなかったという。心配な毎日だったが、順調に成長し、退院して自分の力で泣いている我が子を見たときに、両親は、「元気に泣いているのは赤ちゃんが生きているしるしだと思ったよ」と語って聞かせる。

その話を聞いた「わたし」は、「元気に泣いているのは生きているしるしだって、がんばれ赤ちゃん！」と声をかける。

### 3 今年度の実践について ①道徳的価値の共有「2つの授業実践から」

4年道徳「生きているしるし」

学習課題「一人一人の命はなぜ大切なのでしょう。」



児童同士の「心」の交流。道徳の授業を通して本心をぶつけ合う。  
週一回の道徳の授業を通して児童との関係づくりを大切にしている。

(授業での取り組み)

☆導入で「命とはどんなものか？」を問いかける。(児童の中である程度の理解はある。)

- ・教材「生きているしるし」を読む。
- ・親の気持ちを考えることで、多角的に「命の大切さ」について考える。
- ・改めて「一人一人の命はなぜ大切なのか」を問いかける。

☆導入と終末で同じ質問をすることで児童の学習の変容を把握する。

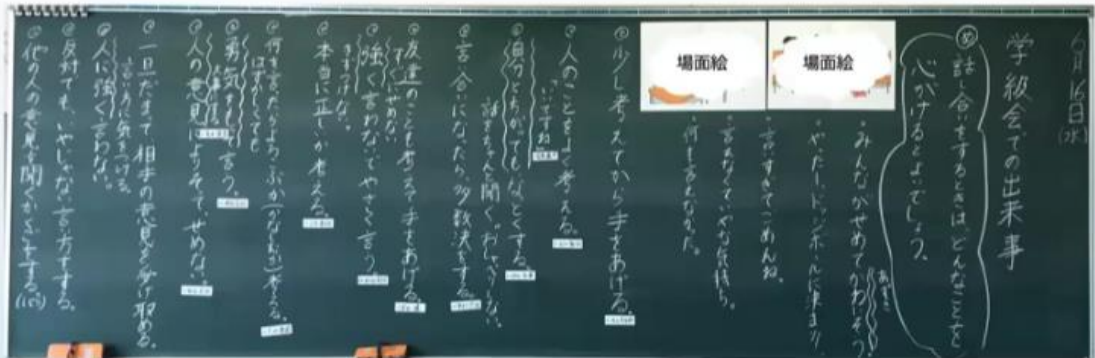
- ・家族の写真、教師の説話などを聞き授業に余韻を残して終わらせる。

### 3 今年度の実践について

#### ①道徳的価値の共有「2つの授業実践から」

4年道徳「学級会での出来事」

学習課題「話し合いをするときは、どんなことを心がけるとよいでしょう。」



「学級会での出来事」 あらすじ

集会の内容を決める話し合いで、「ドッジボール集会をしよう」というクラスの人気者の意見にみんなが賛同するが、ある女の子は「ドッジボールは苦手な人もいるから歌の集会にしよう」と提案する。

すると、「自分がやりたくないのではないですか」「みんながいいと言っているのにわがままではないですか」などと、ドッジボールに賛成していた子たちが口々に反対意見を言う。

それを聞いた女の子は「みんながいいならドッジボールでもいいです」と元気をなくしてしまふ。

歌の集会の方がいいと思っていた「わたし」は、何も言えなかった。

#### 道徳授業と日々の児童指導によって…

問題行動のある児童ではなく、その周囲の児童の様子が変容してきた。「〇〇さん、ちゃんとやろうよ」「〇〇くん、手伝おうか」など、徐々に声を上げてくれるようになった。

その結果、周囲の児童からの声かけによって問題行動が減少しているように感じた。

道徳授業によって価値を共有し、道徳的価値の獲得を目指すだけでなく、自己の持つ道徳的な価値観をさらによいものにするこの必要性を感じた。

この授業ではロールプレイを取り入れ、登場人物の気持ちになりきることで、自分の考えを深めていくことができた。

### 3 今年度の実践について ②道徳的価値の醸成

醸成・・・あるものの状態をよりよくする

道徳授業によって即座に児童の行動が変容することは求めない

道徳授業は「その後の人生の楔」に

道徳の授業で個々の道徳的な価値観を共有することは大切

支部テーマ「生き方を励まし、勇気づける道徳授業」をヒントに

児童の成長は家庭だけでなく、学校でもない

家族の背中を押し、児童の生き方を励ます、勇気づける（循環）

「学習したことから、命の大切さについて理解しているようでした」

「自分も友達も大切にするにはどうしたらよいか、話し合いました」

「出産をひかえた親戚の話をしたら、赤ちゃんもお母さんも頑張って命が生まれてくるからすごいと出産の大変さをわかっているようで嬉しかったです」

学校の授業で友だちと考え、家に帰って家族と言葉を交わす  
子どもたち一人一人のもつ道徳的価値をさらに深めることにつながる

「道徳授業の様子がよくわかりました」

「子どもと話すきっかけになりました」

授業者も背中を押され勇気づけられた

(学習後の指導)

- ・この一時間の授業で完結させず、次の日の朝学習でこの授業の振り返りをした。道徳的価値の醸成。この先の人生の楔にしていく。今までの生き方を認め、これからの生き方を勇気づける。
- ・道徳の授業を学校だけで終わらせるのではなく、「道徳通信」として家庭にも発信している。授業の様子や、子どもたちが考えたことを便りで伝え、保護者から感想をもらう。学校と家庭を往還した学びに繋がっていく。また保護者からのメッセージは授業者のやる気を後押しするものにもなっている。



## 提案のまとめとふりかえり

児童の姿の即時的な変容が見られずとも、児童を取り巻く周囲の友だちや家族との関わり方が変わること、児童のもつ道徳的な価値観がより深まっていくのではないかと感じられた。

**児童本人と周囲の人々、道徳の授業と日々の児童指導、これらはどちらも欠かせない両輪であることが実感できた。**

児童本人が変わらずとも、その周囲の人々との関わり方が変わること、児童本人にも良い影響を与えていく。

評価のポイント
数値ではなく記述である
個々の内容項目ではなく大きくくりなまとまりを踏まえた評価である
他者との比較ではなく個人内評価である
考えの広がりや深まりを評価する
具体的な取り組みの様子を一定のまとまりの中で見取

手立て
(1)個々の学びを見とる手立て ・授業記録 ・道徳ノート
(2)考えを共有しているか 『共通解』
(3)自分ごととしてとらえているか 『納得解』
(4)振り返ることによる授業の質的改善 ↳指導と評価のさらなる「一体化」へ

4 5 分の授業の中だけでなく、日々の生活や人との関わりの中なかでも子どもの道徳的価値は深まっていく。

(右)は指導と評価の一体化についての考え方である。評価をもとに授業者、子どもにとってよりよい授業について考えていく。

③成果と課題
考えを共有し合う道徳授業
学校だけで終わらない学び
児童→保護者→授業者→児童...という循環
授業記録や道徳ノートによる振り返りと見取り
子ども自身による道徳科学習計画

協議テーマの提案
①道徳的価値を共有するための手立てや学習活動
②道徳的価値の醸成に向けた取り組み
③指導と評価の一体化について、有効な手立て
④児童の本心を引き出すために有効な学習活動について
⑤子どもたちが考える道徳学習計画について

## 原先生の提案について協議・質疑応答

(参会者)

Q「道徳通信」は毎週どれくらいの頻度で発行しているか。保護者からのコメントは子どもにどのようにフィードバックしているか？

(提案者)

A ほぼ毎週、保護者の感想を聞きたいと思った時に発行している。

何通か保護者からの返信があり、次の週の学級通信でフィードバックしている。

保護者の名前は公表しないが、子どもたちには、保護者の感想を読んで聞かせるようにしている。

(参会者)

Q 学級通信で道徳を伝えるのはよい取り組みだと感じる。自分も同じように A4 の手紙の下を切り取れるようにして、家庭からのコメントをもらっている。保護者からのアクションに授業の効果を感じている。

質問として、個の道徳通信に載せる内容は、学習した内容、教師の道徳的な価値などどのようなものを載せているか？

(提案者)

A 学習内容を主に書いている。どんな問いをしたか、グループでどのような活動をしたか、どんな答えが出てきたか、時に板書載せることもある。他には子どもたちの様子を見て感じたこと、感想や家庭への問いかけなどを載せている。

(参会者)

感想：初任者で中学1年生の担任をしていた時、週一回の道徳の授業が子どもたちを優しい気持ちにしてくれたことを思い出した。国語や数学が苦手な子も話を聞いたり、語り合ったりするのは意欲的だった。継続的に取り組むことで子どもたちに変容が見られた。普段勉強が得意でない子がどのような道徳教材が心に残ったかを記録し積み上げていくことも効果的である。道徳通信は今後も是非続けてほしいと感じた。

(参会者)

Q「生きているしるし」学習課題と発問の意図をもう少し詳しく教えてほしい。

(提案者)

A 学習のはじめに「学びの方向性」を教師がしめしている。初めの課題は命についてどれくらいのことわかっているか把握するために聞いている。学習を進めていく中で同じ質問をすることで、学びが深まっている、広がっているかを確認するようにしている。イメージとして、45分学習課題が一貫するようにしている。

(参会者)

Q 授業実践が二つ紹介されたが、二つ目に紹介した「学級会の出来事」は、授業の前半、後半で変容を比べる「生きているしるし」とアプローチが異なる。そのあたりの違いを教えてほしい。

(授業者)

A 二つ目の「学級会の出来事」はロールプレイから子どもの意見を聞く硫黄にした。45分の授業意を通して、最初にもっている意見をさらに実感をもって考えられるように、その後の具体的な生活に目が向けられるようにしている。

(参会者)

Q 視覚的に子ども意見を取り入れるために板書で意識していることは？

(提案者)

A 同じ質問をした時は「左」「右」で考えの変容が見られるようにしている。またネームプレートを張り、子どもたちに自分の意見がきちんと学習に生きていることを感じられるようにしている。  
また1回で内容を理解できないような教材の場合は場面絵を効果的に使うようにしている。

(参会者)

Q「場面絵」について、教科書に載せられている枚数や、大きさについてはどのように感じているか？

(提案者)

A 指導書付属のDVDの中にある挿絵を活用させてもらっている。2から4枚程度の場面絵が用意されていてちょうどよい。あまり場面絵が多すぎても、板書がやりにくくなってしまうので、このくらいの枚数が適切だと感じている。また登場人物が多い教材は整理するために、登場人物の顔のイラストを使っている。役割演技の際にもそのイラストを服につけることで、状況の理解がしやすくなる効果もある。

(参会者)

Q 子どもから本音を聞き出すための先生の視点、意見をさらに深めるための視点はどのようなものか？

(提案者)

A 子どもたち同士が言ったことを認めあえる雰囲気であることが大切だと考える。人の話を聞く、認め合うこれらを四月の時から子どもたちに確認しているくようにしている。

また子どもたちの本心、具体的な生活場面に即した答えが出るとうれしい。「休み時間に、放課後に、家で」のような具体があるとより本心に近いのではないかと感じる。

みんなで認め合う雰囲気づくり。具体的な場面をイメージできる補助発問を意識している。

「〇〇さんはこう思っているけど、どう思う？」のように子どもたちにふり同士で考える時間設けるようにしている。そこで出てきたつぶやきなども拾うようにしている。

(参会者)

Q 教師の出どころはどんなところだと感じているか？例えば、子どもから出ている意見が方法論の羅列にならないように学びを深めているか？

A どの子の意見も認める事を大切にしている。子どものつぶやきを時に拾ったり、授業後に話を聞きに行ったりすることもある。授業を進めていくと様々な方向に意見が広がっていく。この中でどれがよいということではなく、「自分の意見を持てましたか」と最後に問いかけるようにしている。

クラスの意見、合意形成ではなく、自分の考えをもって終わらせるようにしている。

提案② 横浜国立大学教育学部附属横浜小学校 小山統成先生



小山統成先生









子どもの一人一人の学びについて

# 個と個、個と集団のかかわり

実践例（6年）ばかじゃん「新しい道徳」（東京書籍）

① 友達と仲良くしたいのに、けんかする→相手のことを知る  
交り合う  
共通のしり  
友達と仲良く→しり距離  
相手のしり  
何で話す  
共通のしり  
お金の貸借か  
欠け  
2人つかない  
えんが、お金の

② 友達とのしり、関係して外口どうすればいいか？  
「ばかじゃん」  
前の学校のしり思っている  
無相しり（話しり）  
相見しり（相見しり）  
「ばかじゃん」  
前の学校のしり思っている  
お金の貸借か  
お金の貸借か

2つの考え  
相手が「嫌な感じ」でしり×  
しりしてしり  
相手の思っているしり  
自分のしり、しり、しり  
（教員）  
お金の貸借か  
お金の貸借か

マグネット

お互いの考えの共通点や相違点などを整理し、共通解をつくる

立場を表明することで、自分の考えを相手に伝えようとする子や「〇〇さんの意見を聞きたい。」といえる子が増えることも。

友だちの「ばかじゃん」という言葉を許せるか？個々の考え方の違いを整理し、共通解、納得解を見つけていく。

子どもの一人一人の学びについて

## 学びのドーナツ理論

学び手 (I) が外界 (THEY世界：文化、理論、道徳、基準など) の認識を広げ、深めていくときに、必然的に二人称世界 (YOU世界：人物、道具、言語、教材など) との関わりを経由する (佐伯胖 1995)

子どもの一人一人の学びについて

## 個の見取りを授業に生かす～指導と評価の一体化～

子どもが他者とかわること (他者の自分と異なる教材への見方・考え方)

子どもが教師とかわること (問い返し・意味付け・価値付け)

道徳的諸価値

子ども

教材

他者

教師

子どもが教材とかわること (教材を通して見てきたこと)

教材・他者（友達）・教師と子どもがかわることによって、道徳的価値に対する見方を容れさせる道徳的価値との結びつきを深めるこの部分を見取りたい！

教師、教材、友だちといった他の存在を経由していくことで道徳的諸価値を深めていくことにつながる。

子どもの一人一人の学びについて

## 個の見取りを授業に生かす～指導と評価の一体化～

### 個の学びを見取る

子どもの考えを把握したい≠授業を自分の思い通りに進めたい

どの子にとっても学びのある時間にしたい  
子どもには何が見えているのか

個の学び、材とのかかわり方、考えの変容を見取る

ノートへのコメント  
パフォーマンス評価  
座席表の作成

子どもと共に学びのストーリーを描くことができる

子ども一人一人に寄り添うことができる

子どもの一人一人の学びについて

## どのような学習集団を目指すか

新しいクラスで2ヶ月道徳科の授業を続けてきて

いいなあ…  
自分の意見を伝えようとする姿  
～さんと似ていて…  
ちょっと違って…  
付け足して…

うーん…  
話し合いではなく意見の言い合い？  
子ども同士で深められそう？

授業は教師の思い通りにするのではなく、子どもにとって学びのあるものにしたい。  
何が見えているか、何を学んでいるか、教材とどう関わっているか、どんな変容があるか。  
子どもを丁寧に見取る。子ども一人ひとりに寄り添えるようにする。

どのような学習集団を目指すか

## 道徳化における場づくり

子どもたちが語るときの**語尾**や**身振り手振り**に着目して…

「～じゃん？」  
「…って思うんだけど、いい？」  
「ここまでわかる？」 「～でしょ？」

どのような学習集団を目指すか

## 道徳化における場づくり

手を挙げて  
「はい、～だと思えます。」 活発な話し合い？ ← 意見の言い合い？  
「はい、〇〇だと思えます。」

「とは」「なぜ」と問える子  
子ども同士で問いあえる空間  
真理に向かって協働的に学び合う時間

C: さっきの〇〇さんの考えに質問なんだけど…  
T: どう？納得できた？ C: それは…という意味で…

**学級風土 × 話し合いのルール**

授業の中でもっと問いについて深めてほしい。

人に本当に伝えたい時には力が入る。子どもたちの「〇〇じゃん？」「□□でしょ？」といった言葉にも注目。

## 対話とは…

これに対して対話では、前進運動を強いるために不安定な状態が保たれている。歩行の類似を考えざるをえない。歩行では、絶えず自分自身を前方に投げ出してバランスを失うことによって、前に進むのである。歩くときに、両足を同時に地面に固定させることはない。一步前に踏み出すことによって、さらに一步前に踏み出すことができるようになるのである。対話では、それぞれの議論は反論を引き起こす。反論はもとの議論を超え、そのことによって、もとの議論も反論も超えるところまで引き上げられる。

『探求の共同体』マシュー・リップマン 著

対話とは、ただの意見交換ではない。質問や意見を返さないとも互いに関連付かない。発言者も聞く人も何も考えていないし、一緒に何かの謎を探求していない。  
(中略)

対話とは、相手の意見によって思考が触発されることであり、一緒に同じ問題を探求し、いわば議論という冒険にみんなで行くということ。

『じぶんで考えじぶんで話せるこどもを育てる哲学レッスン』河野哲也 著

## 対話のルールを見える化する

### 学級風土 × 話し合いのルール

探求の共同体において促進され発展するスキルや性向

- ・ 質問する
- ・ ステレオタイプ化を避ける
- ・ 主張の根拠を尋ねる
- ・ 説明仮説を展開する
- ・ 状況の違いに気づく
- ・ 人の考えをもとにする
- ・ 適切なアナロジーを使う
- ・ はっきりしない概念を明らかにしようとする
- ・ 区別や関係づけを適切に行う
- ・ 説得力のある理由をつけて意見を裏づけする
- ・ 例や判例を挙げる
- ・ 背後にある前提を明らかにしようとする
- ・ 適切な推論を行う
- ・ バランスのとれた価値判断を行う
- ・ 筋の通った批判を受け入れる
- ・ 「物事の他の側面」を開くのを歓迎する。
- ・ 人格を尊重する

『探求の共同体』マシュー・リップマン著 (P242-248)

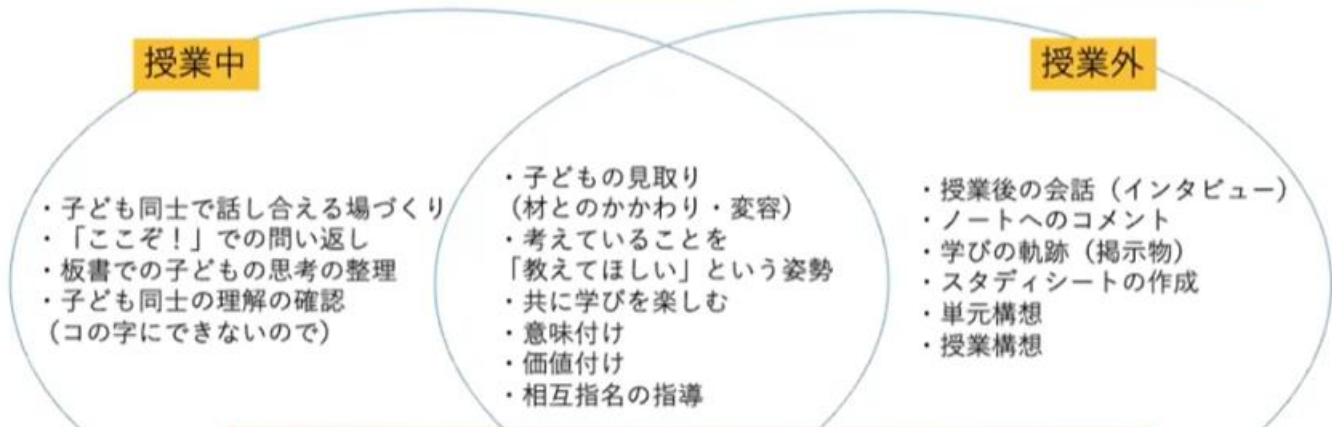
ただの意見の言い合いではなく、経験をもとに対話する「議論」にしていきたい。

そのためには学級のルールや話し合いのルールといったスキルや心がまえが必要である。

授業の参加の仕方、話し合いの学び方を蓄積し、「共に学び合う空間」をつくる。

# 教師の役割(心がけていること)

授業の主役は子ども = **できるだけ出ない** → **出ないために、できること**



**道徳科の指導と評価の一体化を目指して**  
～一人一人の生き方を励まし、勇気づける授業づくり～

教師は子どもたちが語り合える雰囲気づくりを考える。



## 考え、議論する…自分の悩み…

考え、議論する道徳 = 時間との戦い

子どもたちと共にじっくり語り合いたい

教材を読む時間  
自分の考えをノートに書く時間

## 授業と授業の“間”の時間を有効に使う

年間35時間という時間を有効に使いたい

T: ただ黙って自分の考えを書く時間はもったいない

T: 「話し合いが盛り上がっているところだけど、時間だね…」

C: 「先生！まだ言いたいことがあったのに！」

T: (教材の範読は大切…でもゆっくり読んでいたら、10分以上かかってしまうなあ…)

C: 「先生、もう少し考える時間が欲しいです！」

T: (後からノートを見て) 「まあ、考えを書く時間は7分しかなかったらこのくらいが限度だよなあ…」

## 授業と授業の“間”の時間を有効に使う

「スタディシート」の活用  
自分の考えを事前に作ってもいいのでは？

授業と授業の間を埋める  
次の時間までに考えをつくる

話し合いに入る前に語りくる子

ゆっくり考えを書きたい子

家族や友達と話したい子

受け身→主体的に

スタディシート 大テーマ「あだち」と神楽くすりに対し…

『だってっやうは四人組で』  
「しゃんがあれで押しつぶされたのは、なぜだろう？」



どおるの気持ちや考えとモヤモヤ…とおろかなしむと自分もかなしい一人には、他の人がかなしい気持ちになっていることをキャッチして自分のことのように感じる心があるんだね。みんなで神楽くすりのために、相手の気持ちをせうせうしたり、遊び方を工夫したりすることができようぞね！

持ってあげると返ってあげると  
「わたしのやさしさって…」

みんなはどんな子と友達になりたい？  
みんなから一番もらったのは、「やさしい子」でしたね！  
友達にやさしくすることができているかな？  
人にやさしくするには、どんな考えや気持ちが大げなんだろう？  
次回は、みんなで「やさしさ」について考えてみよう！  
【わたしのやさしさって…】自分の考えをつくってきてね！

スタディシートを使って、授業と授業の間の時間を活用することで、全体で話し合う時間をもっと確保してあげられるのではないかと。事前に自分の考えをもつということは、授業の「参加の質」を高めることにつながる。

## 授業と授業の“間”の時間を有効に使う

こんな45分の学習が可能になるのでは

授業で初めて教材を読む

	学習活動
導入	・ 経験を想起する (3分) ・ 教材を読む (5分)
展開	・ 自分の考えを書く (7分) ・ 全体で話し合う (25分)
終末	・ 振り返る (5分)

自分の考えをつかって話し合いに参加する

	学習活動
導入	・ テーマを確認する (1分)
展開	・ 全体で話し合う (35分)
終末	・ 話し合いから見てきたことを振り返る (9分)



## 教師の役割(心がけていること)

教師の出について考える

授業の主役は子ども = **できるだけ出ない**



子どもが強くなっていく  
自分たちで学び(文化)をつくっていく

## 日本道徳教育学会神奈川支部 6月学習会

道徳科の指導と評価の一体化を目指して  
～一人一人の生き方を励まし、勇気づける授業づくり～

・子どもの一人一人の学びについて  
・どのような学習集団を目指すか  
・教師の役割とは

道徳科の時間を通して、子ども一人一人が自己の成長や学びを実感していくにはどうすればよいのか、今後も探究していきたいと思っております。  
ご清聴いただき、ありがとうございました。

提案：横浜国立大学教育学部附属横浜小学校  
小山 統成

### 小山先生の提案について協議・質疑応答

(参会者)

Q 児童の相互指名はどのように取り入れているか？

(提案者)

A 朝の会などでも取り入れている。教師は子どもにすべて任せ、板書をするだけではなく、対話の要所に入って学びを深められるようにしている。「みんなで作る」という学習の文化をつくっている。

(参会者)

Q 相互指名について、子どもが指名する子によって授業が変わってくることもあるのではないかと？

(提案者)

A 子どもたちには「あの子に聞いてみたい」「あの子ならどう思う」ということをきちんと考えてから指名することを常に意識させている。

(参会者)

Q 話し合いの方法を学びながら、どのように繋ぐべきか、相手の意見を「聴く力」も養われている。話し合う力を鍛えるほど、どういう流れになっているかメタ化できるようになる。しかしついていけない子とついていけない子の差も広がっていくように感じる。話し合いの指導をする際工夫していることなどあるか？

(提案者)

A 教育実習生の授業で自分の児童を参観する時間があった。その時36人中、16人が発言していた。しかしその中で5回以上発言していたのは、5人だけだった。何となくその5人の児童が授業を進めているような印象も受けた。休み時間にその5人子どもたちと個人的に話をし、他の友だちがあと10人手を挙げられるように発表を工夫してみよう等の声掛けを行いよりよい話し合いの在り方について、子どもたちと考えたこともあった。全員参加することの意義を子どもに提案するようにした。

(司会者)

ペアによる話し合いや役割演技を取り入れていくことで、子どもの発表する場面を増やしていけるかもしれない。

(参会者)

相互指名はクラスの実態によっては難しい所である。話せる子だけでつながってってしまう。パフォーマンスの構成要素の7割は非言語コミュニケーションによるものである。(マジョリー・F・ヴァーカス) 特別支援級でも、話が苦手な子、表情が読み取りづらい子がいる。しかしその子が何かを感じたちょっとした時に目線が動くなどのしぐさがある。そういった動きやしぐさを見逃さないことが大切だと改めて感じた。

(参会者)

Q スタディシートについてももう少し教えてほしい。

(提案者)

A 振り返りや、教材についての自分の考えをまとめたりする。宿題などとは違い、授業と授業の間に行うことで、学びを連続させていたり、授業前に自分の考えを整理したりできる。授業の参加の質を上げるだけでなく、話し合いの時間をきちんと確保することにもつながる。シートに前回の授業の板書のプリントすることもある。スタディシートを始めてから子どもたちから、「前回の授業の板書がほしい」といった声上がるなどの姿も見られるようになった。

(参会者)

Q 子どもが考えるための相互指名だと考える。しかし教師の手を離れていけばいくほど、相互指名がはじめにつながる原因になることもある。子どもたちのセーフティーが確保されていなければいけない。ハワイの学校では子どもの安全性が担保されていない場合は相互指名を行わないこともあるという。学級経営において、また道徳の授業において、話し合いの際、子どもたちの安全性を担保する手立てがあれば教えてほしい。

(提案者)

A クラス全員が安心して話し合いができるように、友だちの意見を聞くこと、考え方が違うのは当然、だからこそ新しい学びがあること、これらのことを学級でしっかりと確認するようにしている。また子どもたちがお互いを認め合える雰囲気をつくるために、日常的に教師が攻撃的にならないようにしている。常に子どもたちのできていることにたいして「いいね」という言葉がけをするようにしている。

(参会者)

感想：どんな意見にも良さがある。リスペクト、リスポンシビリティを大切にする。相互指名を行っていくうえで教師の人柄と生き方が大切だと感じた。

(参会者)

Q 原先生の提案にも同じような話があったが、原先生は子どもたちのセーフティーを守るための授業の手立てはどうしているか？

(前提案者)

A 授業を見守る姿勢、オブザーバーとしての役割を意識するようにしている。

子どもたちには学びの時間を共有すること、参加すること、認め合うことの大切さを伝えている。

発表ができなくても参加することにも意味があると感じている。

(司会者)

感想：学校だけでは終わらない学びなのだと感じる。

「自分の意見をもてましたか」「内側からあふれる子供の言葉を大切にしたい」という姿勢。

セーフティーは道德の授業だけではない。みんなが成長を実感できるような授業がこれからもできるといい。

(参会者)

感想：昔社会の授業でも相互指名を行ってきた。しかし、進めていくとその型にはまる恐れがある。セーフティーがマンネリ化してしまうこともある。提案にもあったように教師のストーリーに子どもをのせないことが大切。色々なやり方を分かったうえで、適切な方法を選ぶことが大切である。

(参会者)

感想：二人の先生の提案を聞いてやはり道德科は特別な教科であることを感じた。

「道德通信」があるのも道德ならではだと感じる。道德の授業は「道德的な体験を共有する時間」であるが、「道德的な学び」はやはり個に戻っていくものなのだと思う。答えをすべて一緒にするのは無理がある。一回の授業で完結するのではなく、次時につながる学びのフレームをどのようにしていくかが大切である。今話題になっている「個別最適な学び」は道德の授業の再構築につながると感じている。例えば ICT を活用することで道德的意見の共有や個別最適な学びにつながっていくのではないかと考える。

**◎お二人の先生の人柄、授業観、子どもに対する思いが伝わる素敵な提案でした。ありがとうございました。**